

若泉敬著「他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス」を読む

この本は、知っている人にはよく知られているものだが、一般にどれほど知られているのか、私にはわからない。2段組み628ページの大著で、学術書的な面をもっているため、決して読みやすいものではない。

著者の若泉敬（ワカイズミ・ケイ）は、1967年から1969年の終わりにかけて、当時の佐藤栄作首相の特命を受けて、沖縄返還交渉をアメリカ政府要人と極秘に行い、1969年11月に佐藤首相とニクソン大統領との間に交わされたいわゆる沖縄核密約のお膳立てをした人である。

若泉は1930年に福井県で生まれ、東京大学法学部を卒業したのち、ロンドン大学やアメリカのジョージタウン大学の大学院で国際政治学を研究した。初め防衛庁防衛研究所に勤めたが、1965年京都産業大学教授となり、1992年退職して、1996年に66歳で死去した。

本書は、若泉が関わった沖縄返還交渉の経過を詳細に綴ったものである。その内容がどこまで真実であるかを直接に検証することは不可能とってよく、本書の冒頭に掲げられている著者の宣誓を信じるしかない。その宣誓とは、10行の詩の形式を取っており、「私自身の行った言動について/ 私は、/ 良心に従って/ 真実を述べる。/ 私は、/ 私自身の言動と/ そこで知り得た事実について/ 何事も隠さず/ 付け加えず/ 偽りを述べない。」というもので、署名押印がある。

本書を一応読んでみて、私は、上記の若泉の宣誓は信じてよいと思っている。その反面、国際政治学の研究者であったとはいえ、当時まだ30歳代で、外交やそれに類する実務経験が全くなかった若泉に、何故あれだけのことができたのか、不思議でならない。また、佐藤首相が、いわば無名の存在でしかなかった（雑誌に核軍縮などに関して論文的なものを掲載してはいたが）若泉を自分の「密使」として重用したことも不思議である。

重要な外交交渉においては、事務レベルの予備会談を何回もした後で、首脳同士の会談を行うことが普通であり、正式な会談での発言は双方の練達な通訳を通じて行われる。これに対して、若泉は、ニクソン大統領の信任が厚かったキッシンジャー大統領補佐官と2人だけでの秘密会談を何度も行って、そのなかで沖縄核密約の文章を作り上げたのだ。この部分が本書のクライマックスなのだが、それに至るまでのいろいろな機会に、若泉は、ニクソン政権及びその前のジョンソン政権の中枢にいた補佐官や職業外交官との間で、微妙な情報交換を実にこまめに行っていた。このようなことが、特別な訓練を受けていない人に何故できたのだろうか？ これは、若泉が天性の外交官であっただけでなく、とくに優れた英語能力をもっていたことを示すものなのだろうか？

太平洋戦争の終結後、マッカーサーの占領軍総司令部と吉田茂首相との間の連絡・

交渉を担当した白州次郎も外交官の素質をもっており、抜群の英語使いであったことが知られている。しかし、白州の場合は、少年時代から神戸という土地で外国人との交流があり、しかも長期にわたってオックスフォード大学に留学した経験を持っていた。したがって、白州の英語は British English で、これには占領軍総司令部のアメリカ人も一目を置いたほどだったと言われる。このような白州の場合と比較して、若泉には大学院への留学経験はあるが、それほど長期のものではない。したがって、私の上記の疑問に対する答えは今のところ見つかっていない。

一昨日の5月15日は、沖縄の施政権が日本に返還された1972年5月15日から数えて38年となった記念日であった。沖縄返還の裏には、アメリカ政府が核兵器を沖縄に持ち込むことが必要と考えた場合には、日本政府はそれを容認するという密約があったわけだが、この密約を結んだことは「他策なかりし」ものだったと私は思っている。終戦からそれまで、鹿児島県から北の本土から見て、沖縄は外国と同じであった。この異常な状態を早期に解消するには、ニクソン政権にアメリカ国内の返還反対論を抑えてもらうしかなく、そのためには密約を結ぶことは止むを得なかったであろう。

本書はいろいろなことを考えさせるものを含んでいる。とくに、戦争中に領土の一部を占領されたということの重さを私たちはもう一度噛みしめるべきであろう。国家百年の計というものは、こういうことが起こらないようにすることなのだと思う。今の政治家はこのことを本当にわかっているのだろうか。

なお、本書の題は、明治時代の外務大臣陸奥宗光の回想録「蹇蹇録（けんけんろく）」の中にある言葉である。（おわり）